感性豊かに

7日に表彰式

「第4回みんゆう新聞感想文コンクール」には3部門に県内108校から1334点の作品が寄せられ、審査の結果、各部門で最優秀賞1点、優秀賞3点、入選5点の入賞作品と学校賞3校が決まった。表彰式は7日、福島市の福島民友新聞社で行われる。最優秀賞、優秀賞の受賞作品を紹介する。（原文のまま）

コンクールは、小・中学校で新学習指導要領に「新聞の活用」が明記されたのを機に、児童・生徒の広い視野と豊かな心を育む生きた教材として新聞を活用、確かな表現力を身に付けてもらう目的で実施している。

「新聞記事を読んでの感想」をテーマに、今年5月から8月末までに福島民友新聞をはじめ一般紙に掲載された記事や社説、コラム、連載企画などを読んで感動したこと、興味を持ったことーなどの感想文を募集した。今回も、原発事故関連の記事をはじめ、復興関連や終戦記念日に関することなど多岐にわたり、そのことなど多岐にわたり、記事を読んで、感じたこと、自ら体験したことなどを踏まえての作品が多かった。

審査長を務めた福島地区小学校教育研究会国語部長の後藤修福島市立金谷川小校長ら審査員が厳正に審査し、入賞作品を選んだ。

審査員次の通り。

審査長＝後藤修（金谷川小校長）▽副審査長＝佐久間郁文（山木屋中校長）▽審査員＝小野寺千恵（北沢又小教諭）佐藤洋子（森合小教諭）川崎修司（福島大付小教諭）高沢里美（瀬上小教諭）渋谷朋子（野田小教諭）花輪忠康（平野小教諭）佐藤アキ（北信中教諭）大槻幹一（清水中教諭）坂内裕美（茂庭中教諭）

原発事故関連や終戦記念日など多岐にわたるテーマで児童・生徒から寄せられた作品を慎重に審査する審査員

各部門の入賞者

【小学3・4年生の部】
◆最優秀賞
生天目　栞（浮金3年）
◆優秀賞
草野　夏海（平一3年）
梅津　千載（福島一4年）
白土　愛理（泉北4年）
◆入選
渡辺　遥名（福島二3年）
鹿目　大喜（柴宮3年）
谷口　叶美（水保4年）
浜田ひまり（桜の聖母学院4年）
小泉　寿輝（泉北4年）

【小学5・6年生の部】
◆最優秀賞
渡辺　弥生（二本松北5年）
◆優秀賞
芳賀　愛（城北5年）
宮原由気人（原町二6年）
橋本奈瑠美（原町二6年）
◆入選
遠藤　春花（岡山5年）
矢吹　美空（柏城5年）
赤間　祐芽（矢野目6年）
佐藤　乃茄（三河台6年）
草野　雅仁（平一6年）

【中学生の部】
◆最優秀賞
渋谷　岬陽（福島大付2年）
◆優秀賞
香川　布結（会津学鳳1年）
松野　愛梨（郡山二2年）
石川　智喬（郡山二3年）
◆入選
山本　景子（北信1年）
斎藤　凪都（白河二1年）
高田　歩実（会津学鳳2年）
鷲足　広太（郡山二3年）
金野　実紗（小名浜二3年）

【学校賞】
泉北小（いわき市）
郡山二中（郡山市）
会津学鳳中（会津若松市）

思考力高め、効果的な訴え目立つ

「みんゆう新聞感想文コンクール」は、今年で4回目を迎えました。

今回は、自分のために記事を選択し、多様な手段で事実を確かめ、その上で自分の考えを見つめ直している点が素晴らしいと感じられました。

これは、学校教育の中で、思考力・判断力・表現力育成を目指して言語活動の充実が図られ、とりわけ国語科では、「読む」「書く」の一体化した指導を重視し、言語能力の

審査長講評

福島地区小学校教育研究会
国語部長
後藤　修（金谷川小校長）

確実な定着、および日常生活で必要とされる観察・記録・報告・意見文等の言語活動を授業で積極的に取り入れてきた成果だと考えます。

小学3・4年生の部門では、目に留まった記事を家族の手を借りながら正確に読み取って、素直な思いや感想にあふれた作品が多くありました。新聞にふれ、自分の考えを形成していく初期段階として大切にしたいと思います。

小学5・6年生の部門では、複数の記事を読み合わせたり、他のメディアからも多面的に関係付けたりして内容を確かに読み取り、自分の考えを深めている作品が多く見られました。これは、個の考えを他との交流の中で、深め合う、「学び合い」の成果であるとも考えられます。

中学生の部門では、個々に興味深い記事を選び出し、記事をもとに自分の生活や成長と深く関わらせながら、文章構成や引用文の活用等の論旨の述べ方を工夫して、自分の考え方や生き方について効果的に訴えた作品が多くありました。新聞記事が語彙を豊かにし、思考力を高めていると実感しました。

今後の課題としては、応募規定に関するほか、誤字脱字などの表記上の誤りや、事実と意見の文章構成上の混用等、推敲の過程を重視することが大切であると思います。

今後、このコンクールによって子どもたちが、自ら考え、判断し、行動して、福島県の復興の担い手となることを願っております。

【中学生の部】

◆最優秀賞
「切実な一番の願い」

福島大付中2年　渋谷　岬陽君

今年の夏、父の実家への手土産は、福島の桃「あかつき」でした。青果店に行った母は、「そろそろ、桃を贈っても大丈夫よね。」とぼくたちに念押しをした後、大きくて形の整ったあかつきを二年ぶりに購入しました。

母の『そろそろ』という言葉は、もちろん放射線による風評被害を懸念した言葉です。震災以降、いくら測定基準値を下回っているという結果が出ていても、母は桃を贈答することはしませんでした。しかし、そんな母の心を動かしたのは、連日、福島産の桃の安全を伝えるニュースや新聞記事の存在です。ミスピーチが関東で桃の甘さのPRをしたり、知事が自ら食してその安全を伝えたりするなど福島産の桃の風評被害を払拭する取り組みが多くのマスコミで取り上げられていました。特に大きかったのは、タイに続き、マレーシアにも県産の桃の輸出が決まったというニュースです。風評被害に厳しい海外の人たちを説得した県の安全対策。ここまで徹底しているのだから、今年は、桃を贈答しても大丈夫と判断したのでした。

ところが、ぼくは、この新聞記事を見て、愕然としました。マレーシアへの輸出決定の上にあるのは、なんと福島第一原発でタンクから汚染水が漏れていたことを伝える衝撃的な記事でした。さらに、その記事は作業員二人が外部被ばくした内容へと続いていました。本当に悔しいです。本当に情けないです。せっかく県産の桃を受け入れてくれる外国の国が新たに決まり、福島産の農作物の輸入規制解除へのはずみとなりそうだったのに、その一方で汚染水が漏れていたとは。いくら県産の桃の安全を伝えても、実は、毎時百ミリシーベルトの汚染水が百二十リットルも土壌に漏れていたことを知ったら、県産の桃のイメージは総崩れです。いつまでこんなことが続くんだろう。気持ちが暗くなりました。汚染水の管理の甘さについてはこれまでも幾度となく指摘がありました。それなのに、何の進歩もありません。早くこの問題を解決しないと福島の復興に向けて尽力をつくしている人々の心が折れてしまうと思いました。復興に向けて進みたいけれど、背中にはいつも原発の問題があり、一歩を踏み出すとまた背中を引っ張られてスタート地点へ戻されてしまう。進んだ分だけ反動が大きくて苦しくなってしまう。とてもつらいです。

山形の祖父母は、ぼくたちが持っていった桃を、亡き曽祖父母の仏壇に供え、「福島の桃はとっても甘いから、きっとひいばあちゃんも喜んでいるよ。」と優しく話してくれました。ぼくたちを支えてくれる多くの人々の気持ちが心に突き刺さります。原発と汚染水の迅速な処理はぼくたちができない故に切実な一番の願いです。

◆優秀賞
「たくさんの人々の『優しさのきろく』」

会津学鳳中1年　香川　布結さん

私がこのニュースを最初に知ったのは、テレビをつけた時だった。私は通学に電車を使っているため、「電車」に関するニュースが放送されると、興味をもたずにはいられない。事故などがあったら大変だ。そのニュースは私の頭に鮮明に残っていた。そして、九日後の七月三十一日、新聞を読むことを日課にしていた私は、ある記事を見つけた。それがこの「電車押す輪自然と　駅員が難航　乗客も次々」の記事である。テレビのニュースでは全ての内容がわからず、事故があったということしか記憶していなかった

が、記事を読んで驚いた。約三十二トンもある車両を押し、転落しはさまった女性を助けたというではないか。数人の力ではどうすることもできないが、一人一人が協力し、わずか八分で救出できたというこの事故のてん末に、感動せずにはいられなかった。

私も、人に助けてもらうことはたくさんある。学校を休んだとき、私に勉強を教えてくれた友達。重い荷物をもってくれる妹。そして、知りあいではない人も、助け合って生きている。知らない人に助けられるのは、「はずかしい」という気持ちもあるけれど、「ありがとう」の気持ちの方が先にくる。事故が起きたときに、いくつ、「ありがとう」と言われるような気持ちがうまれるかによって、事故の結果は変わってくると思う。今回もたくさんのあたたかい気持ちが集まって、女性を救出できたのだ。

日ごろから「協力」しなさいと言われている私にとって、このニュースは、「協力」するとこんなにすばらしいことがおきるんだ、ということでも確かで圧倒される証拠となった。少し間違えれば死に至る状況で、見ず知らずの人のために、ここまで力を出すことができるなんて、この電車にのっていた乗客は、この女性を助けたいという思いが、とても強かったんだなぁと感じる。私も、この場所にいたら電車を押していたと思うが、急いでいる時だったらどうだろうか。もしかしたら、できないかもしれない。助けた人の中には、外国の人も、中学生ぐらいの女の子もいたという。この「助ける」という気持ちには、年齢も性別も国籍だって関係ない。事故の様子を写した一枚の写真の、無数の手が、その気持ちを表していた。

私も、もっともっとその気持ちにふれ、その気持ちをつくり出したい。そんな思いで、毎日暮らしている。こんな、心の中があたたかくなるような記事が増えればいいのにと思う。新聞記事には、ニュースを伝えるだけではなく、そのような役目もある。この記事は、助けた人達の「優しさのきろく」なんだと思った。

◆優秀賞
「被爆国としての原点とは」

郡山二中2年　松野　愛梨さん

青い空、強い日差し…。六十八年前のあの日も今日と同じように暑かったのだろうか。

私は、今年、郡山市中学生長崎派遣団の一員として、平和祈念式典へ参列することができた。そこで読み上げられた長崎市長の平和宣言。帰宅後、私は、新聞に掲載されていた全文をじっくりと読み返してみた。

すると、当日聞いたように、平和宣言の中で、二度繰り返した言葉があることが確認できた。それは、「日本政府に、被爆国としての原点に返ることを求めます。」という言葉である。「被爆国の原点」とはどういうことなのか、私はじっくり考えてみた。

長崎では、原爆資料館を見学したり、被爆された方に会ったりした。今まで戦争や原爆についての本を読んだり、国語の時間に学習したりしてきたが、実際に、自分の目で見聞きしたことは、想像をはるかに超えるものばかりだった。十一時二分を指したまま止まっている時計、背中の皮ふがはがれ真っ赤な肉が見えている少年の写真、母親の死体のそばでたたずむ十代ほどの女性の姿など、資料館に展示されているものは、どれも目をそむけたくなるほど悲惨なものだった。

また、被爆された方の話を聞いた。空襲警報が解除され、兄と一緒に防空ごうから家に戻った直後に見えた原爆搭載機。日本軍と勘違いし、大きく手を振りながら「おーい、おーい。」と叫んだという。その瞬間、空がピカッと光り、ドーンという音と共に下から突き上げられたそうだ。思い出すだけでもつらく、おそろしい体験だったと思う。それにも関わらず、私達に語り継いでいるのは、「もう二度とこのような悲しい体験をしてほしくない。」という強い願いからだと感じた。

長崎市長が話された「被爆国としての原点」。それは、戦争という悲劇を二度と繰り返さない。そして、被爆者を二度と作らないということを意味していると、長崎での体験を思い出す中で理解することができた。

原爆投下から六十八年。長崎は、焼け野原だったとは思えないほど美しい街なみに変わっていた。それは人々が互いに支え合い、悲しみを乗り越えて、明日への希望を持ち続けたからこそ復興できたのだと思う。

平和のために私ができること。それは、原爆の体験を後世に語り継いでいくことだ。今、原爆についての本を数冊読んでいる。被爆者の気持ちにもっと寄りそいたい。当時何が起こったのか、数多く知っておきたいと思ったからだ。そして、いつか日本や世界の人々に平和の大切さを訴えていきたい。今、それが私の目標である。核兵器がなくなり、世界中の一人ひとりが笑顔で夢を持って過ごせる「本当の平和」が、一日でも早く訪れるように…。

◆優秀賞
「ナガサキから伝える『平和への思い』」

郡山二中3年　石川　智喬君

私は今「平和への思い」を強く感じています。なぜなら、被爆者や高校生平和大使が世界に訴えていることに触れたからです。そして、私たちも彼らと共に訴えていかねばならないことがあると思いました。

私は今年の夏、長崎市にある平和公園、爆心地公園、そして資料館を訪れました。最初はただの観光に来たつもりでした。しかし、資料館に展示されていた熱線で溶けたガラス瓶、ケロイドに覆われた顔、被爆者が残した手記などを見ているうちに、原子爆弾とはこれほど恐ろしいものか、と思いました。また、少し前まで観光気分でいた自分が恥ずかしくなりました。熱線で全身に大やけどを負い、水を求めながら死んでいった被爆者。生き残っても、白血病やがんが発病して一人、二人と死んでいった被爆者。そして、今日まで生き延びてきた被爆者までがいつ発病するか分からない原爆症への不安や心の傷に苦しめられているのです。のたうち回りながら死んでいった被爆者を思うと胸が苦しくなりました。それと同時に原子爆弾とは何と非人間的なものだろう、と思いました。一瞬にして十五万人もの人々を傷つけ、そのうち七万四千人もの尊い命を奪った原子爆弾。なぜ人間はこのむごい兵器を作らねばならなかったのだろう、と思いました。

また、私は「平和への思い―私が継ぐ」を読み、被爆者について新たなことを知りました。被爆者の「平和への思い」を受け継ぐ高校生平和大使が集めた「核兵器廃絶」を求める署名は今年の夏、開始から十二年余りで百万筆に届いたのです。今、被爆者の声を次の世代へ伝えようとする若者たちがいること。そして、多くの人々が核兵器のない世界を求めて活動に参加していることを知りました。

現在、被爆者の高齢化が進み、私たちが直接、被爆者の声を聞くことが出来る最後の世代になりました。被爆者は「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ウオー、ノーモア・ヒバクシャ」と必死に訴えているのです。私たちは百パーセント被爆者の思いを伝えることは出来ません。しかし、世界で唯一の戦争被爆国民として、世界の人々に「核兵器の非道さ」や「核兵器のない世界」を訴えていく必要があるのです。そして、ナガサキが最後の被爆地になるように世界の人々全員が努力しなければならないのです。

世界に「核兵器廃絶」を求めていくのは、被爆者や高校生平和大使に限ったことではありません。私たち一人ひとりが「平和への思い」を伝えていかねばならないのです。私たちは直接、被爆者の声を聞くことが出来る最後の世代として。そして、世界で唯一の被爆国民として、世界に「核兵器廃絶」と「平和への思い」を訴えていかねばなりません。